第４７回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～ 」開催

８月３日(土) 本部２階会議室において第４７回「はちしん灌花塾」が開催されました。

地域史家高橋教雄先生を講師にお招きして「白山信仰を育成した越前の宗教情勢」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方３３名が受講しました。

＜北陸の宗教的位置＞

越前・加賀・美濃の国境に位置する白山連峰は、古来から白山信仰の聖地として栄えてきた。白山連峰は大陸からの渡来人にとって、日本海航路の目印となり、山頂に白雪をいただく山容は、朝鮮からの渡来人が信仰した古代の山岳宗教の象徴であった。

白山は８世紀に泰澄が開山したとする伝承があるが、本格的に行場として開拓されたのは、天台宗が北陸に進出し支配的となった９世紀以降である。

＜越前沿岸部の情勢＞

仏教が伝来（６世紀）する以前の４世紀から５世紀に朝鮮からの渡来人＝海民(かいみん)が能登半島に進出し、大陸伝来の変化観音である韓神(かんしん)・蕃神(ばんしん)が受容され、若狭彦(わかさひこ)、気比(けひ)、気多(けた)神社などの神宮寺(じんぐうじ)が創建された。

渡来の観音信仰は越前沿岸部に広がり、北陸には地域独自の大陸系の文化と信仰が定着していた。

元来北陸は大和政権から疎外化され、異郷性や反体制的な雰囲気を持った地域であり、観音信仰の行場（山林修行）にふさわしい精神的風土を持っていた。

７世紀に高句麗(こうくり)が滅亡すると、大和政権は能登の七尾湾に兵站(へいたん)基地を設け、蝦夷への軍事行動の北陸進出拠点とした。能登は日本海航路の地勢的重要性が高まると同時に観音信仰に対する政治的重要性も高まり、気多大社（羽咋市）は航路の安全や朝鮮からの渡来人たちの邪気(じゃき)や穢(けが)れを祓(はら)う場所として重要視された。

８世紀に全国に災害や疫病が蔓延すると、災害疫病を払拭する機能を持つ韓神・蕃神として注目され、大和政権はこの地方の神祇(じんぎ)（十一面観音信仰）の懐柔をはかり組み込むことで、大和政権への全面的服従を強いる政策に転回した。

＜9世紀の北陸の情勢＞

９世紀の桓武朝の時代になると修行のための山林寺院が整備され、仏教の密教的要素と道教の山岳宗教観が融合し修験道が成立した。

とくに越前南部の越知山（おちさん）、文殊山（もんじゅさん）、吉野ヶ岳（よしのがたけ）、日野山（ひのさん）に囲まれた地域は、朝鮮半島と交流があり、朝鮮からの渡来の海民が定住し、在野の修行僧が山林修行を行う大陸伝来の観音信仰圏として注目された。

＜白山開山の泰澄大師が生まれた＞

『泰澄和尚伝記』には、泰澄は越前の麻生津（あそうづ）の船乗りの子で、越知山（おちさん）で修行したのち白山を開山した。臥行者（ふせのぎょうじゃ）と浄定行者（きよさだのぎょうじゃ）という船乗りの従者がいたとある。

泰澄が生まれた南越前は大陸文化が根付き、河川の修築と水運などの技術が集積する地域で、渡来帰化人（海民（かいみん））が住居していた。

越知山大谷寺（おおたんじ）は海民たちの水難、疫病等の厄除けの守護神であり、航海安全を願い十一面観音の加持祈祷（かじきとう）を行うなど、現世利益を祈る韓神（かんしん）信仰の拠点であった。

桓武天皇が推進した山林修行施策により、全国に山林寺院が整備され、より苦行を伴う行場での修行により験力（げんりき）を求める目的の行場として、低山から高山の山林寺院を目指し、白山は山林修行の練行（れんぎょう）、修行場となった。

＜大谷寺本堂内陣の仏像と発掘品＞

大谷寺の本堂内陣の中央には十一面観音像があり本尊となっている。その左には最古（１４９３年）の「木造泰澄及二行者座像」があった。（※現在は国立博物館に収蔵）本尊の右には大谷寺周辺から発掘された土器のかけらが展示されている。土器の年代は古いもので９世紀に作られたものである。

伝承では、泰澄の白山開山は８世紀となっているが、大谷寺一帯の発掘品の年代は最古のもので９世紀であり１世紀の違いがある。

＜越知山の山岳宗教の成立と麻生津（あそうづ）の泰澄寺＞

越知山には大谷寺（おおたんじ）、朝日寺（あさひじ）、泰澄寺（たいちょうじ）、猿田彦神社（さるたひこ）など泰澄ゆかりの寺社が多くあり、山岳宗教の行場であった。この行場では、麻生津に生まれた泰澄は地域にある泰澄寺から大谷寺まで毎日３０キロメートルを往復し修行したとされている。

＜越前へ天台宗の進出＞

泰澄の開山伝承の源流に９世紀後半に宗叡（そうえい）・賢一（けんいつ）が白山に登ったとする公式記録があり、この２人は実在した天台宗の僧侶である。

天台宗は諸神について本地の菩薩仏（ぼさつぶつ）を固定する本地垂迹説を唱え、全国の寺社の天台支

配を進めた。神と仏は同格同一であり、仏が衆生を救済するために神の姿になって現れるとする神仏一体の思想が醸成された。

天台宗は本地垂迹説と白山信仰を結び付け白山三所権現の勧請と造像を論拠として越前に進出した。そして、越前五山の山林寺や地域の里山寺は天台宗の支配に入り安定した寺院として存続した。

＜泰澄の実像＞

泰澄の実在を証する史料は『根本説一切有部毘那耶雑事』の署名だけである。

越知山で山林修行をする民間宗教者というのが泰澄の実像であるが、９世紀以降に天台宗が越前に進出するにあたり、泰澄を白山の開山や中央朝廷と結び付けることで権威化・虚像化し、『泰澄和尚伝記』が生まれた。その後、天台宗平泉寺は虚像化した泰澄像を世に現すことで北陸の宗教支配をした。

＜まとめ＞

最後に先生は、「泰澄が７１７年に白山に登ったかはわからないが、越知山一帯には山林修行僧の集団があり、この中の修業僧が行場を求め白山に登ったかもしれない。９世紀になり天台宗の修行僧が白山に登ったという史実は残されているが、泰澄は越前のこうした名もなき修行僧たちの代表と考えられる。」と締めくくられました。